

オンライン日本語学習辞典のデザインについて

カイザー シュテファン

0 はじめに

従来の辞書はいうまでもなく印刷物の形態をとってきた。そのために、Oxford English Dictionary や日本国語大辞典のような、包括的な辞書以外では、常に掲載すべき情報の量と、紙幅とのバランスが問題にされてきたことは、多くの辞書に関する論文や著書で指摘がある¹⁾。一方、最近学生の間で人気の高い電子辞書でも、ポケットなどに入るほどの小型サイズが主流で、そのためにスクリーンが小さく、一時にディスプレイされる範囲が狭く、上記の問題は解決されているとはいえない。加えて、電子辞書の内容も通常、印刷辞書のもを電子化しただけで、新しい媒体に適したデザインにはなっていない。

本稿は、インターネットでアクセス可能な媒体としての日本語学習者のための辞典のデザインについて検討することを目的としているが、そのためには伝統的な辞書のデザインとの違いと対照しながら、オンライン辞書の可能性について考察する。

なお、本研究は科学研究費（研究題目「日本語オンライン学習辞典の開発研究」）のもとで行われる研究の一部なので、本稿では研究題目にある「オンライン辞書」をそのまま使用するが、用語としては Calzolari 他（1987）で使っている用語、lexical databaseの方がよいかもしれない。

1 印刷辞書のマクロ構造について

辞書学では、辞書の構造をマクロとマイクロに分けて考えることがある (Hausmann and Werner 1991: 2746ff)。前者は見出し語の建て方やその形態で、後者はそれぞれの項目の記述内容や内部構造などを指している。

まず、外国人学習者向けの印刷辞書のマクロ構造を見てみると、以下のよう

な点が問題になる。見出し語の配列（または検索）の仕方と、何をもって規範形とするか、である。

1-1 見出し語の配列

母語話者向けの一言語辞書では、当然ながら当該国語で一般的な配列（アルファベット順、50音順、など）に従うが、学習者用の辞書になると、必ずしもそうではないという違いがある。例えば、The Japan Foundation Basic Japanese-English Dictionary (The Japan Foundation (1986), 以下, JF) では、日本語の見出し語をアルファベット順に並べている。一方、Kodansha's furigana Japanese-English Dictionary (Kodansha (1995), 以下, Kodansha) や『外国人学習者のための基本語用例辞典』（文化庁 (1990), 以下『基本語』）では、50音順を採用している。

ローマ字かひらがなかという見出し語の表記は、一部の項目の検索にも影響を与える場合がある。例えば、JF や Martin's Concise Japanese Dictionary (Martin (1994), 以下, Concise) では発音と通常のかな表記にずれのある係助詞ハや格助詞ヘ・ヲを発音通りに <wa> <e> <o> とした形で見出し語にしており、その後に「は」「へ」「を」のかな表記を添えている。一方 Kodansha では、係助詞「は」などをひらがな表記で見出し語にしているが、そこにはかな文字と発音とに違いがあるという情報は示されていない。なお、『基本語』では、「ワと発音する。」という説明がついている。

1-2 規範形 (canonical form) の問題

特に外国人学習者を対象とする辞書では、(想定される) 利用者の検索能力 (Béjoint 1981 : 211) が reference skills と呼んでいるもの) が問題になる。学習者のニーズに合った内容をせっかく辞書に含めても、検索でそれがなかなか見つからなければ、役に立たないわけである。以下の (01) で英語の外国人学習者を対象とする一言国語辞書での扱いを示す (発音情報は省略)。

- (01) **gone** 1 **Gone** is the past participle of **go**.
 2 ... (省略)
- went** is the past tense of **go**.

(Collins COBUILD English Dictionary for Advanced Learners, 3rd ed., 2001)

これは、学習者が上記の形態に接したとき、それが *go* の活用形だという知識を必ずしも持ち合わせていないかもしれないという、利用者の *reference skills* に関する配慮である。

上記の引照の形も示しているように、*gone / went* などの活用形のいわば代表選手として *go* という形が立てられている。辞書学では、その代表的な形態を規範形 (*canonical form*)、あるいは *lemma* や *lemma-word* などという。問題は、学習者が会話の中、あるいはテキストの中で遭遇するいろいろな活用形から、その規範形にたどり着けるための知識・能力があるかどうか、である。

この問題について、対象は英語の二言語辞書や第二言語辞書であるが、Landau (2001: 99) が次のようにいう。

- (02) Because the users of bilingual and ESL dictionaries may not know the canonical forms used as headwords, it is particularly important in these dictionaries that inflected forms that differ markedly from the canonical forms, such as *is* and *went*, be listed as headwords in their own alphabetical positions with cross-references to the canonical forms (*be* and *go* in the examples cited). If space permits, even more closely related inflections, such as *made* (*make*) and *tried* (*try*) should be listed. (下線, カイザー)

日本語の学習者の場合を考えると、上記の問題はどうだろうか。例えば動詞の活用形「ひいて」に接したときに、「ひく」という形に還元できずに検索した場合、多くの辞書ではさじを投げることになりそうである。なぜなら、自明の理のように、「ひく」という形しか見出し語としない辞書が外国人学習向けのものでも多いからである。

例えば、*Kodansha* や *JF* では、「ひく」が見出し語となっているが、その他の活用形はいっさい見出し語になっていない。『基本語』でも同じ方針をとっている。

2 オンライン辞書のマクロ構造について

オンライン辞書の場合、マクロ構造をどう考えるべきか。利用者はページをめくるわけではないので、全体としては「順序」という概念があまり重要では

なくなることが先ずいえることである。それだけではない。1-1にあるような、アルファベット順か50音順かのような、どちらかに決めなければならない世界ではなくなる。複数表記の情報が入力されている（あるいは必要に応じて生成することができれば）、アルファベット表記・ひらがな表記・漢字表記などと、利用者の好きな形で検索ができるように複数の選択肢を与えることができる。あるいは、訳語からの逆引きという方法も可能となる。

規範形の問題については、上記1-2で触れたが、JFのように見出し語の数が3,000にも満たない学習辞典でさえ、活用語の規範形（終止形）意外には、なんら項目が立てられていない。『基本語』（見出し語、4,500）でも同じである。

一方、以下の Concise の例が示しているように、この辞書の方針がかなり違うことがわかる。

- (03) **hiita** 引いた = **hikimashita** 引きました (pulled)
- (04) **hiite** 引いて → **hikimasu** 引きます (pulls)
- (05) **hikanai** 引かない = **hikimassen** 引きません (not pull)
- (06) **hikaremasu** 引かれます, etc., **hikareru** 引かれる, etc. gets pulled (out), gets...
- (07) **hike** 引け 1. → **hikemasu** 引けます [infinitive]
2. → **hikimasu** 引きます [imperative] pull!
- (08) **hikeba** 引けば → **hikimasu** 引きます (if one pull²)
- (09) **hikerya** 引けりゃ → **hikemasu** 引けます (if one can pull)
- (10) **hikimasu, hiku** 1. 引きます, 引く pulls (out); draws; drags, tucks; catches: attracts

Concise では、まさに上記引用の Landau のような方針を少なくとも部分的に実施している。スペースが問題にならないオンライン学習辞典では、当然その線で考えるべきであろう。ただ、媒体が根本的に異なるので、上記のような見出し語の形をとる必要はない。豊富な例文を含むオンライン辞書であれば、検索によって用例で使われている活用形をそのまま引き当てることもできるであろう。ただ、多くの活用形をカバーするためには相当多くの用例が必要になるため、作例の際や実例選択においてなるべく多くの活用形のバリエーションを含む用例を選択することも検討されるべきであろう。もう一つの方法としては、形態素解析を使って活用形から規範形にたどりつくことも考えられる。な

お、形態素解析の問題点については、4-2も参照されたい。

3 印刷辞書のミクロ構造について

印刷辞書のミクロ構造で問題になるのは、見出し語の形態・品詞や活用情報などの提示方法・文法項目掲載の形・定義づけの仕方や配列、例文の有無やその形態、またどんな方針で英訳されているか、などである。

3-1 見出し語の表記の仕方

上記1-1とも関係するが、項目全体の配列ではなく、見出し語内部をどのような表記で提示するかという問題がある。アルファベット順の辞書では、まずどのローマ字表記システムを採用するかという選択肢になる。ただ、ヘボン式があまりにも普及しているので、そういったレベルの選択肢ではないかもしれない。むしろ、同じヘボン式の中でのより細かい選択肢になるとと思われる。例えば、上記の JF では、特にそう断っていないが、いわゆる修正ヘボン式を使っている。Concise でもヘボン式を使っているが、両唇音前のモーラ鼻音の表記は〈n〉ではなく、〈m〉と表記している。また、この辞書では母音の無性化やアクセントが符号で示されている点も通常の修正ヘボン式とは違う。

3-2 見出し語の提示方法 (表記・品詞・活用情報など)

JF では、左右 2 段の対訳形式をとっているが、品詞・活用情報の提示方法の例を示すと、以下のようにになっている。

(11) **hiku** ^{ひく}引く [動 I] **hiku** [v I]

ローマ字表記の後で該当漢字と、その漢字の読みがなが示されているのに続いて、品詞と活用の種類が日本語と英語でそれぞれ略式で示されている。ただ、その情報が何を意味するかという具体的な内容などについては、巻末の Introduction to Japanese Grammar を参照しないと分からない。また、Kodansha では、全体して品詞などの情報は示されていない。これについて、前付けの Organization of Entries の記述には次のような説明がある(ふりがなは省略)。

(12) The entries in this dictionary do not include parts-of-speech la-

bels, but the part of speech of any entry word will be clear to users who know basic Japanese grammar. (: x) (下線, カイザー)

上記のような品詞情報が示されていないのは、そもそも基本的な文法知識を前提としているからである。ただ部分的には、以下のように、英訳を通して理解させることが狙いというものもある（英語では動詞と名詞が同形である場合が多いが、不定形の形を掲載すれば区別がつくという点を利用している）。

- (13) The definitions for verbs are consistently given in the English infinitive form (that is, containing the word “to”), and this convention serves to distinguish verbs from other parts of speech. For example, the verb 賭ける is defined a *to bet, to wager*, whereas the noun 賭け is defined as *bet*. (: x)

また、活用に関しても、Organization of Entries (: ix) に説明があるが、要旨だけ紹介する。-iru / -eru で終わる動詞が通常の一段活用ではなく五段動詞である場合のみ |5| という形でその情報が示されている（不規則動詞も、|Irreg| というラベルがついている）。

上記のように、JF も Kodansha も学習者の形態的な知識に関してはかなり楽観している。現場で日本語学習者を観察していると、授業数200-300時間程度の学習経験をもつ人でも、活用形の誤りが目立つ。

一方、「基本語」では次のような形で情報を示している。

- (14) ひ・く [引く] (動詞)

詳しい引用は省くが、見出し語の後に10以上の活用形が「かーない」のような形で示されている。つまり、中黒の後の部分「く」が「か」に変わり、それに「ない」が付くのが否定形だという意味である。

なお、Concise では、ます形・辞書形の順で並べているのが特色で、その理由としては、話し言葉の辞書であるため、初心者などはこの形に接する機会がもっとも多いからと言っている（一方、形容詞は名詞修飾として使われることが多いため、「い」で終わる形をあげている）。

ここでは、上記2. であげた例を2つ再掲して、Concise における活用形情

報の方針を検討する。

- (15) **hike** 引け 1. → **hikemasu** 引けます [infinitive]
 2. → **hikimasu** 引きます [imperative] pull!
 (16) **hikeba** 引けば → **hikimasu** 引きます (if one pull)

英訳のみで活用形に関する情報を示す場合と、[infinitive] のように活用形の名称をあげる場合、さらには [imperative] pull! のように両方を掲載する場合がある。両方がある方が分かりやすいと思われるが、infinitive だけだと、はたして利用者側にそのような文法用語の理解・知識が期待できるかが問題になる。

3-3 文法項目掲載の形

語彙だけではなく、文法要素も見出し語に立てる学習者向けの辞書は多いが、ここで検討対象としていくつかの辞書では、カバーする範囲にさうとう差がある。

Kodansha で取り上げる係助詞「は」の説明（原文、英語）を要約する。

- (17) この助詞は前接の句を文の主題、または他と対照するものの印。前接の句は名詞に終わる場合は多いが、他の可能性もある。

説明に続いて、例が7例あげられているが、上記の分類のどちらにあたるかの情報はなく、英訳でも強調などによる工夫がなされていない。

一方、JF では同じように二分類を行っているが、例はそれぞれ分けてあげているだけでなく、英訳でもこの助詞の表現機能に注目させようとしていることが伺える。例をあげる（ふりがな・ローマ字・記号は省略）。

- (18) [ものごとを特定的に取り上げて [used to indicate the topic]
 それについて述べるときに使う]
 私は学生です。 I am a student.
 バスの停留所はどこですか。 Where is the bus stop?

こうして工夫を試みているのはいいが、同じ構造の文なのに、強調が逆である

ことはかえって誤解を生むであろうし、そもそもこれだけの説明で強調の意味が理解されるとは思えない。ただ、対比のハでは、このやり方では上記よりは分かりやすいと判断される。ハについては、他にも疑問詞の後には使われないなどの文法情報がある。

Concise では、全体の方針がそうであるように、英訳（一部、「では」「なら」に引照あり）をあげているのみである。

「基本語」では、3分類を行っており、用例も同様に分けてあげている。3番目を引用する。

- (19) 3. /あることを特に取り上げて、その場合にどんなことになるかについて述(の)べる場合に、特に取り上げたものであることを示す。/
 ○お金がなくては何もできない。
 ○お父さんがご病気では、いろいろと心配なことでしょう。

説明が抽象的で理解しにくい上、外国人学習者に対する日本語による文法説明の限界を示しているといえよう。

3-4 定義づけの仕方・配列と例文の有無・形態

3-4-1 定義づけの仕方・

JFの対訳形式では、左の欄には（該当する場合）意味分類別に日本語の定義づけをあげているが、右の英語欄ではそれぞれの分類の代表的な英訳を pull; lead などの形で上記の (01) の hiku [v I] に続けてあげている。それに対して Kodansha では、見出し語に続いて意味分類の 1.があるが、to pull など、動詞の前に <to> がついた形式をとっている（上記 (13) 参照）。Concise でも、ローマ字表記に続いて、意味分類別に漢字（混じり）表記を上げ、意味をそれぞれ英語で示しているが、pulls out; draws などと、不定形ではなく、多くは三人称単数で示している。その理由は、Martin (1975) に説明があるが、その趣旨は日本語の「する」は to do という意味ではなく、(someone) does/ will do という意味なので、英語の不定形に置き換えるのが誤解を招くからだとしている³。

配列について検討してみると、JFでは miru を以下のように分類（下位項目化）している（英語欄に日本語表記を適宜加えた形で示す）。

(20) **miru** 見る see, look at; read, look through; examine, look up, try

① [目で見る] [see, look at]

山田さんは部屋でテレビを見ています。

[Miss] Yamada is watching television in [her] room.

昨日、わたしは映画を見に行きました。

I went to see a movie yesterday.

② [読む] [read, look through]

毎朝、わたしは新聞を見てから、会社へ行きます。

I go to work every morning after taking a look at the newspaper.

③ [調べる] [examine, look over, look up, consult, test, try]

この言葉は、辞書を見ても意味がよくわかりません。

I don't really understand the meaning of this word even after looking it up in the dictionary.

ちょっと料理の味を見てください。

Please see what you think of the flavoring of this dish.

miru 診る see, consult

風がなかなか治らないので、医者に診てもらいました。

[I] went to see a doctor since [my] cold [[case of the flu]] didn't seem to be getting any better.

(～て) **miru** try, have a try at, test

おいしいかどうか、食べてみてください。

Please taste it and see if it's any good.

その人がいい人かどうか、会ってみなければわかりません。

You can't know what [he]'s like unless you go ahead and meet [him].

Kodansha でも 3 分類をしているが、中身が一部違う。JF で別だてしている「～てみる」を含めていること (ただし、表記に関する注記はない) に加えて、JF の 1 を 2 つの意味に分けているだけではなく、see よりも look at の方を基本義ととらえている。なお、JF の ②、③の意味はない。

(21) **みる** 見る

1. to look at, to watch

さあ、このスライドを見ましょう。

All right now, let's look at these slides.

私たちはテレビでテニスの試合を見ます。

We watch a tennis match on TV.

2. to see

そんなに大きい湖は見たことがない。

I've never seen such a big lake!

犯人が橋を渡るのを見ました。

I saw the culprit cross the bridge.

大坪さんがプールで泳いでいるのを見た。

I saw Mr. Otsubo swimming in the pool.

3. to do and see, to try doing (following the gerund (-て form) of another verb

そのソーダを飲んでみてください。

Please try that soda.

一方、Concise の *mimasu*, *miru* の項目では、番号による分類は行っていない。ただ、ハイフンによって意味の区分はしているようには見受けられるが、そのハイフンの使い方に関する説明（どの程度の意味の差でカンマを使うかハイフンを使うかなど）は見あたらない。

(22) sees, looks, watches; tries doing

なお、JFと違って、KodanshaやConciseでは「診る」に関する言及がないのは、英訳の *see* (a doctor) でカバーされているという判断かどうか不明だが、いずれにせよこの *miru* は *mite morau* という見出し語（少なくとも引照として）の方がふさわしいとも考えられる。

なお、『基本語』では、「1目を向ける」以下、他よりはそうとう詳しい8分類を行っている。ただ、上記3-3での指摘と同様、日本語による意味分類はどの程度学習者に有益か、疑問がある。

3-4-2 例文の有無・形態・翻訳法

Conciseでは、口頭による発話の理解という、算出よりは理解面を使用目的

としているからか、用例は採用していない。その代わり、上記2で示したように、活用形など事細かな形態的な情報を多く含めている。

一方、見出し語の数では Concise (18,000) とあまり差のない Kodansha (16,000) は、多くの「自然な日本語による」用例を含んでいる。JF は、項目数は少ないが、それぞれの項目には多くの例を含んでおり、用例中心ともいえる。上記の例から明らかなように、どちらの辞書も用例の英訳をのせている。

ここで検討を加えたい点の一つは、英訳による定義付けと用例との関係である。

Kodansha では、上記 (21) の「見る」項目にあるように、それぞれの意味の訳語に対する例がきれいに対応するように編集されている。意味(分類) 1, to look at, to watch という訳語を与えた上で、二つの用例はそれぞれの訳語をそのまま含んでいるということで、適切な用例といえる。一方、JF での状況はかなり違う。上記(20)では、意味 1 [see, look at] とあるが、用例では look at がなく、逆に定義にはない watch が用例の訳語として出てくる。意味 2 としてあがっている [read, look through] は、どちらも例文ではいっさい顔を出さず、逆に新たに take a look が訳文で使われている。意味 3 としてたいへん多くの訳語 [examine, look over, look up, consult, test, try] が与えられているが、二つの例文で出てくるのは look up だけで、新たに see what you think という慣用句的なものが使われている。Creamer (1987: 240) が指摘するように、定義付けの範囲を超える用例は問題である。

もう一つ検討すべき点は、翻訳そのものの方法である。Kodansha では、英訳の方針につて、tend to be literal at the expense of naturalness (: xix) (自然さを犠牲にした直訳の傾向がある) といっており、「この部屋は臭いですね。」に対して英語としてより自然な smells bad / stinks を避け、bad-smelling という形容詞を採択している。

一方、JF (: xvi) では語例・用例の翻訳についてかなり長い説明があるが、方針としては上記 Kodansha の説明に近い。ただ、英語母語話者「以外の学習者にも理解し易いように努め」たという。それが具体的にどういうことか説明・例示がないが、より直訳的な方針だと理解してよからう。Kodansha と比べて特徴的なのは、英訳に括弧など記号を添えている点である。「英語にのみ区別のある語彙」を [] 内に示し、「言い換えが可能な表現」は [] 内に示すなどの方針をとっている。上記 (20) の例で説明すると、①の [Miss] Yamada は日本語の「さん」より区別が細かいことを示しているし、また「部屋で」に

対する in [her] room は日本語には[her]にあたる要素がないことを明記している。また、③の cold [[case of the flu]]が言い換えの例のつものようであるが、[[flu]]だけならいいが、このままでは英語としては不自然である。いずれにせよ、このような方針は英訳をかえってややこしいものにしてしまっている印象が強い。

4 オンライン学習辞典のマイクロ構造

4-1 見出し語の表記の仕方

ローマ字の表記システムとしては、一部の言語学者を除けば海外ではヘボン式が圧倒的に多いためにわざわざ訓令式を並記する必要はないように思われる。ただ、ヘボン式にバリエーションをつける場合があるため、上記2-2のモーラ鼻音の表記のような問題が出てくる。

Concise が表記上含めているような母音の無性化やアクセント情報は、オンライン辞典では音声ファイルを添えることが可能なために、表記形式としては不必要であろう。ただ、音声ファイルの具体的な形（男性か女性の声か、アナウンサー流か普通の発音の仕方かなど）については、適切な方針を決定するには難しい面もある。

4-2 見出し語の提示方法（表記・品詞・活用情報など）

まず見出し語の表記についていうと、上記2のとおり、複数の表記が選択できる（あるいは生成できる）形になる。さらには、「ふりがな付きモード」なども必要に応じて利用できる点では、この媒体が印刷辞書と大きく異なる。

次に品詞などの情報をどう表すか、という問題である。オンライン辞書では、前付けや後付けで文法やラベル付けの説明をするわけにはいかないのが、印刷辞書とは異なったデザインが要求される。そもそも利用者にとって品詞などの情報がどの程度必要かよく分っていない部分もあるが、Hartmann(1992: 153)が先行研究の共通理解としてあげている学習辞典のデザイン項目(10項目)の5番目に grammatical coding is detailed and explicit をあげている。上記3-2で引用したいいくつかのやり方がそれにあたるが、オンライン辞書では形態素解析にかけることで品詞情報を得ることは一つの方法である。しかし、日本語の品詞用語を使っている『茶筌』などをそのまま使うわけにはいかないであろう。品詞分類の用語を英語に置き換えるだけでも、多くの利用者が十分な品詞

知識をもっていない可能性が大なので、やはり不十分と思われる。そこで、定義付けの仕方によって、品詞・文法情報を理解させるという方法が考えられる。

一つ参考になるのは、上記2に示した Concise のやり方である。この辞書も、ご多分に漏れず、発音・文法・表記・記号の説明が前付けとしてあるが、本文では見出し語には一般には品詞情報が示されていない。英訳の仕方では品詞が分かるだろうという考え方のようである（あるいは、品詞など分からなくても支障はないということかもしれないが、この方法では文法用語などは理解できなくとも、基本的な文構造や最小限度の品詞情報が読み取れるのではないかと思われる）。

オンライン辞書では、定義づけの代わりに翻訳を使用する方針を採用する意味では、基本的なアプローチは Kodansha や Concise と同じである。問題は、その方法である。

外国人学習者向けに対する辞書でとられる他の方法としては、一言語辞書の一部に見られる controlled vocabulary による定義づけがある。Jansen 他1987によると、Longman Dictionary of Contemporary English の主張では、定義づけでは2,000語の中心義的用法および分かりやすい派生語のみが使われたが、この論文の計算では実は3,000語以上が使われたという。一部の外国人学習者向けの辞書がそうした方針をとるのは、各国語版の辞書を作るのが採算上難しいからという苦肉の策と思われるが、オンライン辞書の作成・編集を長期的に考えた場合、はじめは英訳のみをつけるにしても、スペース的な問題がないため将来的にはスペイン語・中国語・韓国語などをつけることも十分可能である。）

上記1-4で取り上げた翻訳の仕方について付け加える。JF の katsu win という対訳の仕方（JF では動詞の品詞ラベルはある）は動詞か名詞か品詞が曖昧になるため避けるべきである。一方、Kodansha でやっているような、〈to〉のついた不定形は、Martin (1975) がいっているように動詞だと分かるのは利点であるが、日本語の終止形とは明らかに機能が違うという問題がある。

二つの解決法が考えられる。一つは、『和英語林集成』などのように、日本語の不定形を基本形としてあげること。

(23) HIKI, -ku, -ta, ... To pull, ... (2版, 1872)

(24) HIKI, -KU ... To pull, ... (3版, 1886)

利点としては、少なくともある程度日本語に慣れている学習者には活用の仕方がその情報だけで理解できる点にある。あるいは、その形が多くの動詞の名詞形にもなり、「-ます」がそのままつくという形でもある。欠点としては、現在では一般的でない、他の辞書には見られない特徴だということである。また、用例データベースの検索によって、活用形をそのまま引き出すことができることは上記3-2で述べたとおりである。

もう一つの方法は、Martin (1975) が提唱し、Martin (1994) で実施しているやり方である。例えば、自他動詞の扱いを (25) (26) で例示する (日本語表記、省略)。

- (25) **narabemasu, naraberu** arranges, lines them up
 (26) **narabimasu, narabu** they line up, arrange themselves

この方法では、日本語の終止形の機能 (の一部) が適切に翻訳でとらえられているだけでなく、自他の違いまでが表現されている。ただ、用例を掲載しないせいか、それぞれがどのような必須項をとるかまでは踏み込んでいない。そういった情報も加えるとすれば、以下のような形が考えられる。

- (27) **naraberu** (person ga/wa) arranges (object o) in a row
 (28) **narabu** (persons ga/wa) line/queue up

あるいは、NTTコミュニケーション科学研究所 (1997: 271) のように、もっと細かく下位分類していくというやり方も考えられるが、利用者を必要以上に混乱させない注意が必要であろう。

- (29) N1 が N2 に並ぶ N1 line up in/on/at/ N2
 N1 が N2 と N3 で並ぶ N1 equal N2 in N3
 N1 が N2 に並ぶ N1 be lined up in/on/at/ N2

オンライン辞書における文法項目に関する情報についてさらに考えてみる。上記3-4で見たような印刷辞書のやり方と同様に、見出し語としてたてて説明などを加える方法は一つ考えられる。助詞二などのように多義性の強い項目の場合、下位分類の形で示せばよい。ただ、電子媒体の辞書の特性を考慮した場

合、もっと別のやり方が考えられる。それは何かというと、文法項目のタグ付けである。下位分類の番号に従ってオンライン辞書に含まれる用例の全部、あるいはある文法項目を例示する上で特に有効と思われる例文のみでもよいが、タグをつけることによって、当該文法見出し語にリンクを張ることが可能である。つまり、印刷辞書と違って、タグ付けをすることによって、辞書中の関連項目が自由に検索できるということで、辞書と文法書の区別がほとんどなくなってしまおうという世界になり、電子媒体が最大に活かされる。

最後に、用例の英訳について触れておく。3-4-2で見てきた定義づけとの関係は、オンライン辞典でどう考えるべきか。見出し語にユニークなID番号を与えた上で、用例とリンクさせることになるが、数多くの例文の英訳に含まれている訳語を英語の定義づけをどのようにマッチできるか、試作版作成の中で考えていかなければならない問題である。

また、自然な英訳か直訳かという問題は、紙幅に限りのある印刷辞書の場合とは性質が違ってくるように思う。少ない用例しか用意できない場合にはある程度自然さを犠牲にする必要が出てくるが、用例が包括的であれば自然な英訳を与えることが可能になる。ただ、印刷辞書の場合よく報告されるような、最初の用例だけを参照するというに終わらないようなユーザー・インターフェースをどう用意するかがポイントになる。

なお、現段階ではデータの形や入力が主な検討課題であり、利用者がデータにアクセスする際のユーザー・インターフェースのデザインは今後の課題となる。

注

- 1 日本語で書かれたものでは、たとえば石綿（1994：75）を参照。
- 2 原文のままである。この if one pull という英訳法については特に説明がなく推測するしかないが、上記の not pull の場合、does not pull と will not pull の両方が含まれるという利点がある。同様に、if one pull の場合 if one were to pull などもカバーしている。しかし、それなら現在形の場合、pulls など不十分になる。なぜなら、will pull という未来形を含んでいないからである。この点については、3-4-1も参照されたい。
- 3 『日ボ辞書』や『和英語林集成』では、動詞の連用形を見出し語の最初にあげているのも、そのような認識からであろう。(23) (24) 参照。

引用文献（欧文）

Béjoint, Henri (1981) The foreign student's use of monolingual English dictionar-

- ies: a study of language needs and reference skills. *Applied Linguistics* 2, 3: pp 207-222
- Calzolari, Nicoletta, Eugenio Picchi and Antonio Zampolli (1987) The Use of Computers in Lexicography and Lexicology. Anthony Cowie (ed.), *The Dictionary and the Language Learner: Papers from the EURALEX seminar at the University of Leeds, 1-3 April 1985*. Tuebingen: Niemayer, pp 55-77.
- Creamer, Thomas (1987) Beyond the Definition: Some Problems with Examples in Recent Chinese-English and English-Chinese Bilingual Dictionaries. Anthony Cowie (ed.), *The Dictionary and the Language Learner: Papers from the EURALEX seminar at the University of Leeds, 1-3 April 1985*. Tuebingen: Niemayer, pp 238-245.
- Hartmann, R.R.K. (1992) Lexicography, with particular reference to English learners' dictionaries. *Language Teaching* 25, pp 151-59.
- Hausmann, Franz Josef, and Reinhold Otto Werner (1991) Spezifische Bauteile und Strukturen zweisprachiger Wörterbücher: eine Übersicht. Franz Josef Hausmann, Oskar Reichmann, Herbert Ernst Wiegand, and Ladislav Zgusta (eds.), *Wörterbücher, Dictionaries, Dictionnaires: Ein Internationales Handbuch zur Lexikographie, An International Handbook of Lexicography, Encyclopedie internationale de Lexicographie*, 3 Vols, Berlin: Walter de Gruyter, 1989-91, Vol.3: pp 2729-2769.
- Jansen, J, J.P. Mergeai, and J. Vanandroye (1987) Controlling LDOCE's Controlled Vocabulary. Anthony Cowie (ed.) *The Dictionary and the Language Learner: Papers from the EURALEX seminar at the University of Leeds, 1-3 April 1985*. Tuebingen: Niemayer: pp 78-94.
- Kodansha (1995) *Kodansha's furigana Japanese-English Dictionary*. Tokyo etc: Kodansha International.
- Landau, Sidney I. (2001) *Dictionaries: The Art and Craft of Lexicography*. 2nd. ed. CUP.
- Martin, Samuel E. (1975) Selection and Presentation of Ready Equivalents in a Translation Dictionary. Fred W. Householder and Sol Saporta (eds.), *Problems in Lexicography*. Bloomington: Indiana University.
- Martin, Samuel E. (1994) *Martin's Concise Japanese Dictionary*. Boston etc: Tuttle.
- The Japan Foundation (1986) *The Japan Foundation Basic Japanese-English Dictionary*. Bonjinsha.

引用文献 (日本文)

- 石綿敏雄 (1994) 電子辞書について。日本語論 2・4 : pp72-77.
- NTT コミュニケーション科学研究所 (1997) 日本語語彙大系 5 : 構文大系, 岩波書店
- 文化庁 (1990) 【外国人学習者のための基本語用例辞典 (第三版)】

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(B)(1)), 課題番号14380116, 研究題目「日本語オンライン学習辞典の開発研究」の助成を受けている。